

タカラバイオ株式会社 2024年3月期 第1四半期決算(補足資料)

1. 2024年3月期 第1四半期業績について **【決算短信9ページ】**

(売上高)

- ・ 「試薬」は、新型コロナウイルス検査関連試薬が減少したことなどにより、前期比▲51億3,300万円(▲42.6%)減収の69億900万円となりました。
- ・ 「機器」は、PCR装置が減少したことにより、前期比▲4,600万円(▲17.5%)減収の2億2,000万円となりました。
- ・ 「受託」は、遺伝子解析/検査関連受託が減収となりましたが、再生医療等製品関連受託が増収となり、前期比7,500万円(5.8%)増収の13億6,600万円となりました。
- ・ 「遺伝子医療」は、遺伝子治療薬製造補助剤(AM製品)レトロネクチン®の売上が増加したことから、前期比1億8,000万円(36.1%)増収の6億7,900万円となりました。
- ・ 以上により、売上高は、前期比▲49億2,500万円(▲34.9%)減収の91億7,600万円となりました。

(売上総利益)

- ・ 減収により、前期比▲36億3,100万円(▲35.9%)減益の64億9,300万円となりました。

(営業利益)

- ・ 売上総利益の減益に加え、研究開発費などの販売費一般管理費が増加したため、前期比▲41億1,400万円(▲90.7%)減益の4億2,300万円となりました。

2. 2024年3月期 上期連結業績予想の修正について **【決算短信10ページ】**

【業績予想の修正に関するお知らせ】

海外(米国・中国・欧州)における「試薬」、「機器」などの販売が低調なため、売上高、各利益項目が前回予想(5月11日公表)を下回る見込みとなり上期業績予想を修正しました。

(売上高)

- ・ 「試薬」は、150億8,300万円と、前回予想を▲29億9,700万円(▲16.6%)下回る見込みです。主要地域では、日本が前回予想並みに推移するのに対し、米国・中国・欧州が前回予想を下回る見込みです。
- ・ 「機器」は、4億9,200万円と、前回予想を▲4億1,200万円(▲45.6%)下回る見込みです。細胞解析装置、PCR装置がともに前回予想を下回る見込みです。

- ・ 「受託」と「遺伝子医療」は前回予想並みとなる見込みです。
- ・ 以上により、売上高は194億円と、前回予想を▲34億円(▲14.9%)下回る見込みです。

(営業利益)

- ・ 販売費一般管理費の削減に努めるものの、売上総利益の減益により、営業利益は11億円と、前回予想を▲10億円(▲47.6%)下回る見込みです。
- ・ 通期の業績予想につきましては、売上高、各利益項目ともに下期の構成比が高い計画のため、予想を据え置きます。

3. 試薬事業の状況について

- ・ 新型コロナウイルス検査関連試薬は、感染症法上の位置づけの変更などに伴い販売が減少しました。第1四半期の売上高は、前期比▲50億円減収の6億円となりました。
- ・ 一般研究用試薬は、米国・中国・欧州の販売が低調で前期比▲1億円減収の63億円となりました。

(参考:第1四半期試薬売上高)

	新型コロナ検査 関連試薬	一般研究用試薬	合計
23/03期	56億円	64億円	120億円
24/03期	6億円	63億円	69億円

4. 上期の試薬事業、機器事業の海外販売の状況について

- ・ 米国、欧州では、インフレや人手不足などの経済環境の悪化により、企業やアカデミア研究機関が研究開発投資に慎重になる傾向がみられます。また、中国では、ゼロコロナ政策解除後も、研究機関向けの政府予算が削減されるなど、これらの地域ではバイオ産業支援市場の市況が厳しくなっており、当社も少なからず影響を受けています。
- ・ 当社では、新製品開発の加速、グローバルな製造体制の再構築、BtoBカスタム製品の営業対応の強化など、地域に応じた効果的なグローバル対応を進めることで売上を増加させ、期初の業績予想の達成を目指します。

5. 研究開発トピックス

- ・ 当社が開発を進める、脳指向性に優れた遺伝子治療用 AAV(アデノ随伴ウイルス)ベクター CereAAV™ について、公益財団法人東京都医学総合研究所との共同研究により、網膜内の細胞への高効率な遺伝子導入を確認しました。引き続き、本技術の応用化開発を進める他、CDMO 受託を通じ製薬企業等に本技術の提供を行ってまいります(2023年5月11日付プレスリリース)。
- ・ キメラ抗原受容体(CAR)とキメラサイトカイン受容体を効率よく同時に発現させることができるレンチウイルスベクターを開発し、慶応大学・籠谷教授らとの共同研究においてマウスを用いた実験で、非常に強い抗腫瘍効果を確認しました。本技術は CAR の標的になる抗原の種類に関係なく、広く適応可能な技術であり、CAR-T 細胞療法の有効性と安全性を高めることが期待されます。
本研究成果について、第 29 回日本遺伝子細胞治療学会学術集会(2023年9月11-13日、大阪国際会議場)において発表を予定しています(2023年7月18日付プレスリリース)。

以上